

## 「世界は経営でできている」を読んで

例年 10 月 27 日から 11 月 9 日までの2週間は、「秋の読書週間」です。そこで、今回は、話題となった岩尾俊兵著「世界は経営でできている」(講談社現代新書)について、同書の内容を幾つかご紹介しつつ、経営という視点を生活に活かしていくことなどに関して、考えていきたいと思えます。同書によると、著者の岩尾氏は、慶応義塾大学商学部准教授をお勤めとのことで、経営学者としてご活躍されているようですが、本文に「父の会社の倒産と借金、中卒自衛官として過ごした日々、日中に働きながら高卒認定試験(旧・大検)経由での受験勉強、学生起業・・・」とあるように、若い時から様々な経験、いわば同書でいう「経営」の実践をされてきたようです。

経営学の本というと敷居が高いように思われるかもしれませんが、一般向けの新書であり、岩尾氏の信念である「文学と経営の融合」を図る本とのこと。全体の構成は、「貧乏」、「家庭」、「恋愛」、「勉強」、「虚栄」、「心労」、「就活」、「仕事」、「憤怒」など 15 章で構成されていますが、「恋愛」、「虚栄」、「憤怒」などに見られるように、同書は、経営の視点から見た、いわば「人生の指南書」のような本ではないかと思えます。

ここでは、「憤怒」を取り上げて一部をご紹介したいと思います。例えば、怒っている人への基本的な姿勢として、「そもそも怒っている人は脳という『人間が持つ最も有力な器官』を『怒りという何も生み出さない活動』に浪費してしまっている損な人だ。そうした人は脳のメモリを怒りに占拠されてしまうため、脳の活動時間と活動密度が低くなり本来の能力を発揮できていないだろう。このタイプの人は周囲から人がいなくなったり、ハラスメントで訴えられるリスクが上がったりといった不利益も享受している。怒りに身を任せる人は色んなところで相応の報いを受けている可哀想な人でもある。『短期』な人は『長期』の利益は得られない。そう考えればこちら少しは優しくなれる」とあります。

こうして、様々なテーマごとに、「経営」から見た著者の卓見が示されていますが、同書を通底して流れているのは、共通の目的に立ち返ることなどで、各人が求めるものを奪い合うのではなく、知恵を出し、分かち合う、そのことにより価値(幸せ)を創造していくという理念であり、人生をマネジメントしようとする著者の姿勢です。これらには、大いに触発され、目を開かれる思いがしましたし、同書を参考に、合理的で冷静な対応ができれば、色々なことにうまく対処できるようになると思えます。

一方、自分を含め多くの人は、自己の行動を決定する際に、流行、慣行、感情等様々な要素に左右されがちで、必ずしも常に合理的に行動できるわけではありません。そのことは、行動経済学の分野で明らかにされており、2002 年にノーベル経済学賞を受賞したダニエル・カーネマン著「ファスト&スロー」などを読めば、多くの人が、日頃如何に非合理的な行動をしているかということにあらためて気付かされます。紙幅の関係で、具体的な事例等は、ご紹介できませんが、自分にとって都合のいい情報を受け入れがちな「確証バイアス」や人や物の際立った特徴で物事を判断してしまう「ハロー効果」等をあらかじめ知っていると、合理的な判断をする上で大変参考になりますので、興味のある方は、こちらの本もご一読をお勧めします。

令和6(2024)年 10 月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス  
理事長 松井 聡 明